

Strong Bond

1964年7月24日、サンフランシスコジャイアンツの名外野手ボビー・ボンズの家に男の子が生まれた。ボビーは、チームメイトのウィリー・メイズに、名付け親になってくれるよう頼んだ。ハンク・アーロン、ベーブ・ルースに次ぐ、史上第3位660本のホームラン記録を持つウィリー・メイズによって「バリー」と名づけられた赤ん坊は、それから38年後の現在、父やメイズと同じジャイアンツのユニホームを身にまとい、600本を超えるホームラン記録を刻んでいる。

バリー父子に限らず親子ともメジャーリーガーになった家庭はいくつかある。中には、父と子で同時にメジャーリーガーとして同じチームに所属し、親子でアベックホームランを打ったケン・グリフィー父子や、祖父から三代に渡ってメジャーリーガーとなっている家庭もある。互いを認め、尊敬し合う姿勢は、父子の絆や家族の結びつきを大切にするアメリカ社会を紹介するにふさわしい題材といえる。



【Barry Bonds & Mike Piazza】

バリー・ボンズは英雄であるが、それ以上に人々から愛され、野球の神様として崇められている男がいる。1919年、メジャーリーグを震撼させた『ブラックソックス・スキャンダル』*6といわれる八百長事件により、暗くなった野球界にホームランで光を灯したベーブ・ルースである。彼の伝説は、かつて私がそうであったように、野球少年の心に深く刻み込まれるであろう。

God of the Baseball

教護院で野球に目覚め、ボストンレッドソックスで投手として活躍していたルースの運命が大きく変わったのは、1920年1月。ヤンキースへ移籍した彼は、完全に打者に転向した。そして54本、翌年には59本とホームランを量産し、人々を再び球場に向かわせた。ホームラン時代の幕開けである。さらに彼は、1927年に60本のホームランを放つ。ベーブ・ルースはニューヨークヤンキースに在籍した15年間で、7度のリーグ優勝、4度の世界一に大きく貢献し、名門ヤンキースの礎を築いた。

数多くの伝説の中でも、1932年のワールドシリーズで実現させた予告ホームランと、病気で入院している子どもにホームランを打つプレゼントを約束し、見事に実現させ、その子の病気を快方に向かわせた話は大変有名である。

また、彼は1934年に来日し、日本各地を回って18試合を行っている。第1戦の17対1を皮切りに第18戦の14対5まで、沢村栄治の前に苦戦を強いられた第10戦を除くすべてで、ベーブ・ルースとルー・ゲーリック率いる米国チームは、圧倒的な力を見せつけた。それが日本プロ野球リーグ設立の機運を高めることにつながり、1936年に日本職業野球連盟が発足する。ルースは、日本プロ野球にも関係深い人物なのである。



【Babe Ruth】

先述した「ブラックソックス事件」も、アメリカ合衆国ならではの出来事と言える。市場経済のアメリカ社会では、野球という娯楽は人々にとって大きなビジネスチャンスで